

序 文

博物館事務長 熊 野 正 也

エルニーニョ現象の影響であろうか世界のあちこちでは、大きな自然災害が発生し、多くのひとびとの尊い人命が失われた。日本でも梅雨時に多量の雨水で鹿児島県などでは、崖崩れや川の増水によってやはり尊い命が失われている。

人の力ではどうすることもできない。自然のこわさをいやというほど知らされている今日この頃である。それにしても近年、考古学の世界でも特に注目されたしたのは、このような自然災害による遺跡の存在である。現に私が発掘調査に参加した遺跡でも2カ所でそのような遺構が検出された。それは、強烈な地震によって発生した噴砂という状況を示す遺構である。

それらは、東京低地に位置している葛飾区の「新宿」と「鬼塚」という遺跡である。両遺跡ともに古墳時代に属する集落遺跡である。両遺跡の噴砂が発生した時期は、古墳時代の後半のころであった。強烈な地震に襲われた古墳時代後期の人々は、一体その時にどのように対処したのであろうか。

この自然の災害を神の怒りと考え、ただただその怒りをおさめるために、祈りだけをささげたのだけであらうか。否である。新宿遺跡でも、鬼塚遺跡でも、その直後に、人々が迅速に生活すべく行動に移っていたことが、直後に位置づけられる生活跡の存在によってもあきらかである。

このように、われわれの遠い先祖たちがいくども遭遇したこのような自然の災害との戦いを克服し、そして、現在のわれわれの生活があるということを忘れてはならないだろう。人の力ではどうすることもできないということがわかっていても、その自然災害からできるだけ被害を少なくするように努力をしなければならぬことは、考古学がいまのわれわれにその事を教えてくれているのである。

生きた博物館そのものである。本学の3博物館もそのような生きた博物館をめざして、現在、鋭意努力中であるが、それも博物館年報の積み重ねによって可能であらうと考えている。ここに1997年度の年報をお送りしたい。ご活用願えれば幸いである。